

二〇二四年度
晃華学園中学校

第一回
入学試験問題

【国語】

時間…五〇分
配点…一〇〇点

答えはすべて解答用紙に記入すること。

問題は次のページから始まります。

一 次の文章は、醤油や味噌を作るための直径二メートル、高さ二メートルの巨大な木桶について書かれたものです。これを読んで後の問いに答えなさい。なお、本文中の「コラム」や「図」は省略します。

・地獄のもろみませ

ヤマロク醤油の看板商品は、再仕込み醤油。ふつうの醤油とどう違うかというと、もろみを仕込むとき、ふつうは塩水を使いますが、再仕込み醤油は、塩水のかわりにできあがった醤油を使います。つまり「醤油で醤油を仕込む」ということになるので、とても濃厚な味わいになります（本章コラム参照）。

醤油を使って仕込んだもろみは、チコレートのような香りも放ちます。発酵が進んでいくと、さらにさまざまな香りが生まれ、バナナやリンゴ、チコレートのような香りはわからなくなっていくます。

醤油を分析すると、三〇〇種類以上もの香り成分が入っています。麹菌、酵母、乳酸菌といったさまざまな微生物がバトンタッチして働き、醤油のうまみや香りをつくっていきます。こういう調味料は、世界でもめずらしいのです。

初夏に向けて暖かくなっていくと、もろみの発酵はさらに進み、桶のフチからあふれ出しそうなほどふくらんで盛り上がり、色も少しずつ茶色く変わっていきます（図1-8）。

その姿は、まるで焼き上がってひび割れたココアマフィンのように。初夏のゴールデンウィークにかけて発酵のピークを迎えるので、微生物が酸素を吸って元気に働けるよう、かきまぜて空気を送ってやります。たいへんな重労働なので、康夫さんは、この作業を「地獄のもろみませ」と呼んでいます。

茶色いドロドロした、味噌のようにも見えるもろみは、発酵しているとき、

ブツ、ブツ、ブツ……

と音を立て、ブツブツと表面に泡がうかびます。

I

姿が目に見えるわけではありませんが、せつせともろみを発酵させている微生物の気配を感じ、対話しているような時間が楽しくて、どんなにいそがしくても、①「地獄のもろみませ」がきつなくても、蔵の仕事は苦になりません。

ある桶の前に来たとき、康夫さんは、

「？」

なにか、違和感を覚えました。昨日見たときより、四〇〇五〇センチくらい、もろみが少なくなっています。

「あれ、この桶、まだしぼってなかったよな？」

次の瞬間、

「もしかして……、まさか……」

背筋が凍りつきました。それはおそろしい予感でした。

階段をかけおり、木桶の下に走っていくと、床に、もろみの茶色い液体が大量にしみ出しています。

「いかん！」

頭の中が真っ白になりました。ご先祖のロクロベエさんが設置した一五〇年の木桶が寿命を迎えて、ついに壊れたのでした。

・大桶を直せる人も、つくれる人も、もうおらん？

康夫さんはバケツを取りに走りました。

「残ったもろみだけでも、早く救わんと！」

それは、ヤマロク醤油の看板商品の②再仕込み醤油の桶でした。

③国産の貴重な大豆と小麦を使い、④四年の歳月をかけて発酵・熟成させ、もうすぐしぼって醤油になる予定の大切なもろみです。

一滴たりとも、無駄にできません。

壊れた桶から、バケツでもろみをすくい上げては、別の桶に移します。

両足をふんばり、ずしりと重いもろみを移しかえていきます。

「とにかく早うせんと、早うせんと」

パートの女性と二人、夕方までかかって、なんとか別の大桶に、残ったもろみを移し終えました。

「ふうーっ」

中腰でふんばる作業の連続でした。どっどつかれを感じたのは、すべて移し終えてからです。からっぽになった桶を上からのぞくと、組み合わせてある底板のうちの一枚が、ポコンと落ちているのが見えました。

木桶の寿命はだいたい一〇〇年から一五〇年。いつか寿命を迎えるはず、ということは、頭ではわかっていました。

「こうやって、木桶は壊れていくんやな」

そしてふと、

「直してもらうんも、新しい桶つくるんも、もうできる人、おらんのやなかつたっけ？」

桶職人が絶滅の危機になっていることは、木桶で味噌や醤油をつくる蔵元の間で何十年も前からささやかれていることでした。

「新しい桶がつかれんいうことは、これから一〇〇年たたんうちに、ほんまに桶がなくなる、いうことや」

自分が生まれるずっと前からあり、先祖が守りつづけてきた商売の宝。この先もありつづけると、漠然と思っていたもの。

その木桶が、いずれなくなる。なんとなく直視せずに来たその事実をつきつけられると、^④自分がこれまで生きてきて、そしてこれから生きていくための根っこが、ぐらぐらとゆさぶられるような、こころもとない感覚になりました。

二〇〇五年、初夏のできごとでした。

・「木桶」の現状

ところで、いま、日本で生産されている醤油のうち、木桶でつくられている醤油の割合はどのくらいだと思いますか？

答えは、たったの一パーセント。九九パーセントの醤油は、ステンレス製、あるいはFRP（強化繊維入りのプラスチック）やコンクリート、ホーローなどのタンクでつくられています。

今使われている木桶は、江戸時代から戦前にかけてつくられたものです。

木桶の板は多孔質で、目に見えない小さな穴がたくさんあいています。その小さな穴に、「蔵付き」といわれる、その蔵独自の微生物がたくさんすみついています。酵母や乳酸菌といった微生物は、何十年、何百年と時を重ねるうちに、独自の進化をしていきます。

結果、その蔵、その木桶の中だけのⅡができて、そこにしかない酵母や菌が生まれます。その独自の微生物が作りだす味や香りの成分が、蔵独特の醤油や味噌の風味の決め手になります。

逆に、木桶は手入れをおこたると、良くない菌が繁殖する危険性もあります。一度Ⅱがくずれて変なクセがついてしまうと、立て直すのが難しいのです。

その点、ホーローやステンレス、FRPのタンクは、表面がツルツルなので洗浄しやすく、管理が簡単です。温度管理をしたり、機

械で空気を送って攪拌したりすることもできるため、熟成の期間を早めること（速醸といいますが）が可能です、三か月から長くて半年ほどで出荷することができます。

木桶以外の容器でつくる場合、容器に微生物がすみつくことができないため、多くの場合は耐塩性の乳酸菌や酵母など、発酵にかかわる微生物を購入して加えます（木桶以外の容器でも、速醸したり、買ってきた微生物を入れたりしない醤油づくりをする蔵元もあります）。

木桶でつくる醤油は、多くの蔵元では、木桶にすみついた乳酸菌や酵母に熟成を任せます。人間が櫂棒を使って攪拌し、温度も自然のままに任せるため、熟成するのに一年から二年、再仕込み醤油の場合は、仕込みに使う醤油づくりから数えて四年かかります。

・蔵人の宝物、微生物と木桶

木桶の醤油づくりで蔵人にできることは、微生物が働きやすい環境を整えることだけ。醤油や味噌をつくる主役は微生物で、これは人間には手出しのできない領域です。ひたすら彼らにお任せするしかない、ということですが。

「微生物にお任せする」というと、簡単そうに聞こえるかもしれませんが、道具の洗浄や手入れをきちりしなければならなかったり、櫂入れのタイミングの見極め方やかきませ方など、ひとつひとつの作業を、五感をとぎすませて行ったりする必要があります。

こうしてできた醤油には、^⑤蔵ごとの個性が強くあらわれます。

——こうばしくて、かすかに燻したような香りの醤油。すっきりして、ほのかに木の香りが混じる醤油。こつてりと濃厚で、カラメルのような味わいの醤油。

これは、味噌づくりをする蔵の場合も同じです。

——甘みと酸味のバランスのすぐれた味噌。きゅつと締まった塩味、まろやかな旨みを感じる味噌。どれも、ほかのどこの蔵にもない味です。

「やっぱり、うちは〇〇さんの醤油じゃないと」

「代々、△△さんの味噌で味噌汁をつくっているの」

その言葉が、蔵元にとってなによりもうれしく、商売の要でもあります。

蔵独特の微生物は、古くから木桶で醤油や味噌をつくってきた醸造蔵にとってなくてはならない宝物で、その微生物がすみつく木桶

も大切な財産です。

しかし、その木桶も、木桶をつくる職人や桶を締める竹のたがを編む職人がいなければ、木桶が壊れたり、たががゆるんだりしても、修理することができません。もちろん、新しい木桶をつくることもできません。

(もし、木桶が壊れたら? いったいどうしたらいいのだろうか?)

木桶で醤油や味噌をつくる蔵人たちは、

(なくなったらなくなった時。いずれにしてもずっと先のこと……)

(祈ろう。とりあえず今残っている桶が壊れないように、祈ろう)

祈るか、なんとなく考えないようにするか、選択肢がないのでした。

(竹内早希子『巨大おけを絶やすな! 日本の食文化を未来へつなぐ』)

問一 I にはどのような言葉が当てはまりますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 「地獄みたいやな」 イ 「息苦しそうやな」 ウ 「機嫌よさそうやな」 エ 「なんか文句ありそうやな」

問二 ——線部①『地獄のもろみませ』がきつても』とありますが、なぜ「きつ」いのですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 夏の暑い時期に、換気かんきの悪い蔵の空気の通りを良くするために、とても重い櫂棒を使うから

イ 木桶の中の微生物に空気を送るために人力でかきまぜるが、それがたいへんな重労働となるから

ウ 木桶の中のもろみが発酵する際に熱を発生して蔵の中の温度が上がり、たいへんな暑さとなるから

エ 中腰で両足をふんばって重いもろみをバケツですくいあげるので、足腰に負担がかかるから

問三 ——線部②「再仕込み醤油」とありますが、その説明として正しいものはどれですか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「醤油で醤油を仕込む」ので手間がかかり、日本でつくられる醤油のうちでたったの1パーセントしか生産できない

イ もろみが発酵するとココアマフィンのようになり、できた醤油はチコレートのような香りがする

ウ できあがった醤油でもろみを仕込むので熟成の期間が短くなり、三か月から半年で出荷できる

エ 塩水ではなく醤油でもろみを仕込むので、完成までに時間はかかるが濃厚な味わいになる

問四 ——線部③「四年の歳月」とありますが、なぜ四年かかるのですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えな
さい。

ア 貴重な国産の原料を使っているので、通常二年かかる発酵・熟成に、二倍の時間をかけるから

イ 木桶でつくる醤油は熟成するのに二年かかり、その醤油で仕込むのでさらに二年かかるから

ウ 再仕込み醤油は看板商品なので、不良品がないように商品を四段階に分けて点検をするから

エ 「地獄のもろみませ」を機械にまかせるのではなく、機械の四倍の時間をかけて手作業で行うから

問五 ——線部④「自分がく感覚」とありますが、その感覚の説明として不適当なものは何ですか。次のア～エの中から一つ選び、
記号で答えなさい。

ア 自分が醤油職人として生きる土台のようなものがなくなってしまいううで、不安でたよりない感覚

イ 自分が生まれる前からあり、先祖が守り続けた宝を、絶やしてしまうような感覚

ウ 桶職人の後継者がいなくなりつつあるのに何もせずにいて、申し訳ないような感覚

エ 自分の代で子孫たちも恩恵を受けるはずの木桶がこわれてしまい、未来が失われるような感覚

問六 ——線部⑤「蔵ごとのくあらわれます」とありますが、それはなぜですか。本文中の言葉を用いて六十字以内で説明しなさい。
ア 食物連鎖 イ 免疫力 ウ 耐久性 エ 生態系

問七 ——線部⑤「蔵ごとのくあらわれます」とありますが、それはなぜですか。本文中の言葉を用いて六十字以内で説明しなさい。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「咲」の祖母「こよみさん」と祖父の「そーふ」は、「咲」の住む京都市内から電車を乗り継いで一時間ほどの山科やましなに二人で暮らしていた。しかし、その「こよみさん」が病気で亡くなってしまった。

咲はこよみさんがちよつと苦手だ。きらいなのではない。ちよつとおつかない。いや、そうではない。緊張きんちやうするのだ。かあさんという。いつもきりきりしゃんとしているなあ、と。だからなのかもしれない。クラスの仲良しの浅子にもおばあちゃんがいる。いつもここにこしていて、感じがぜんぜんちがう。それでも、咲はこよみさんにひかれる。なんだろう。

それは、たぶん、こよみさんがつかう「ことば」なのだ、と思いいあたった。こよみさんは魔法まほうのように、ことばをその場にぴったり合わせてつかう。そうすると、咲は心が I おちつくのだ。咲にとってはふしぎな魔法だった。

こよみさんをそう思うようになったのは、こんなことがあったからだ。

ある日、こよみさんは起き上がりこぼしのおみやげをもって咲の家に行って来た。まゆだままゆだまでできたそれを何度もころがしては起き上がらせ、そのたびに、こよみさんは、

「けなげなやつだなあ」

そういった。

そうか、これを、「けなげ」というのか、と咲は思った。

それからは、ア리가 II えさをほこぶところやアサガオが種からちゃんと芽を出したのを見ると、「けなげなやつちゃんなあ」と、咲はつぶやいてしまう。こよみさんがつかうことばは、いつも「あっ、これがそうなんか」というそのときの様子とぴったりにかさなるのだ。

「せつない」も「さりげない」も ① そうしておそわった。

そーふが近くの友だち、といってもそーふよりうんと年上の友だちの家に行って、夕方になっても帰ってこないの、心配になったこよみさんと咲とにちゃんがかえに行つたときのことだ。

「いやあ、話がはずんで、長くひきとめてしまつて」

その人はいいながら、なにか用事があるかのようにそのまま門の外に出てきて、咲たちが見えなくなるまで見送ってくれた。「ああして、さりげなく見送られると、うれしくなるし、せつなくなるねえ」

夕暮れの中、^②自分の胸をだきしめるようにこよみさんがいったときも、咲はすぐうなずいた。

しかし、その気分も、Ⅲ先を歩いていったにいちやんが、「バイバイ」と大声を出し、ぶちこわしになってしまったが。

そんなこよみさんだが、そーふがいないと、こよみさんとはなにを話しているのかわからない。こよみさんから機嫌をとるようには話しかけてくれるということはない。だから、いつも本を手に行っているか手仕事をしているかのこよみさんに話しかけることがむずかしい。

一方、そーふは、山科の家に行くといつもいっしょになにかしてくる。そーふは三年前定年で会社をやめた。今はときどき、大学に教えに行く。クマムシの研究をしているが、教えるのはそれではない。会社でやっていたデータにもとづく市場調査のやり方。統計学という学問だそう。それを聞いたとき、

「クマムシを教えたらええのに。ちなみに、おれやったら、ダンゴムシの生態を教えるのになあ」と、にいちやんはいった。

「ちなみに」は、にいちやんがなにか特別にいうときの決まりことばだ。こよみさんがつかったことばの中で気に入って、今ではひんぱんにつかう。そして、ダンゴムシもにいちやんのお気に入りなのだ。

「足は十四本もあるんやで。子どものときは十二本、これもおもしろいやろ。大人になると、ふえるんや」

「そうか、ダンゴムシか。そりゃいいなあ。ダンゴムシもクマムシも昆虫ではないんだもんな」

そーふはわらっていった。

昆虫ではないクマムシは、「緩歩動物門」という種類の生きものだ。ちなみに、ダンゴムシはエビやカニと同じ「甲殻類」の仲間だそう。だ。はじめにクマムシを虫眼鏡で見せてもらったときはびっくりした。苔の下から出てきた。四対の足でゆっくりと歩く。クマのようにのっしのつしと。^③一ミリにもみたくないのに。

そーふは命あるものならなんでも好きだ。いろいろな小さな生きものや木や草をそだてている。だから、にいちやんも咲もそーふの家に行くのがたのしみなのだ。

そーふは「生きものがかり」。こよみさんはそのそーふの生きものにかこまれて、本を読んだり、手仕事をたのしんだりして、そのときどきの心とびつたりのことばをつかうから、「魔法つかい」ならぬ「A」。咲はかつてにそう決めた。

「そう、咲は十一歳さいになったの」

咲がケーキを食べおわったとき、こよみさんはいった。さつきもいった。

この間の大寒だいかん後の一月の咲の誕生日の日だった。

亡なくなるひと月ほど前の日曜日だった。

「そう」

またつぶやいて、こよみさんはなにか考えこんだ。

咲もだまっただまま、きのうのことを考えた。

春休みに学校では絵のコンテストがある。きのうは、そのクラス代表を決める日だった。

咲はえらばれたかった。絵のテーマが好きな動物だったからだ。カバを描かきたかった。耳の内側がピンク色のカバ。投票用紙に自分の名前を書こうとして、やめた。そうまでして出たいのか、と思った。えらばれる、ということは自分以外の人たちから推おされなければ意味がない、と思った。

で、結局えらばれなかった。くやしかった。そのときだった。浅子が「おしかったね」といった。ほほえんだように思えた。むしろに腹が立った。^④返事をしなかった。そして、ずっとそのことを浅子にあやまらないままにしている。

「咲、咲さん」

こよみさんに呼びかけられた。

われに返った咲はこよみさんを見つめた。

「咲、散歩に行こう」

いうなり、こよみさんは、「よっこらしょ」とつぶやいて、ソファからゆっくり立ち上がった。

そのころ、こよみさんのからだの調子はまだおちついていて、ベッドにいたことが多かったが、少し長い入院のあと、退院して、ゆっくりとそーふとの暮らしをつづけていたのだ。最期さいごは家で、ということだったのかもしれない。それでも、遠出はむずかしい。

だから、誕生日には去年までならそーふとこよみさんが咲の家にやって来たのだが、今回は咲の家族が出かけることにした。とうさ

んも、きちんと休みをとった。日曜日でも、仕事関係の用事で会社に行くことがあったのに。

「よし」

そーふも立ち上がった。

「気をつけて」

かあさんが台所からいった。

とうさんとにいちやんがラグビー中継を見ながら、「いつてらっしゃい」とそろって声をかけた。

こよみさんを車椅子くるまいすにのせ、そーふが押すその横で咲はゆっくり歩いていった。

(中略)

「そうか、咲は十一歳になったんだ」

こよみさんは何度めかのそれをつぶやいた。

「もう百回めだよ」

そーふがわらった。

「そんなには」

咲がいうと、

「ううん、胸のうちではもつとつぶやいていたんだよ。そうか、そうか、って」

こよみさんはいった。

散歩からもどって家にはいるとき、こよみさんがささやいた。

「今度、わたしの十一歳のときの話をするね。話すにはちよつと勇氣のいる話。さ・も・し・い・話」

咲は、「さ・も・し・い」ってなに？ という顔をした。はじめて聞くことばだ。しかし、こよみさんはあとはなにもいわず、やさしくほほえんでいるだけだった。そして、それはそのままになってしまった。

こよみさんが亡くなったからだ。

三月にはいつて、十日がたった。

この日、咲はそーふの家にかあさんで行った。

しかし、そーふはいなかった。

「あ、行方くらまして」

そういつて、かあさんはわらった。

合鍵あいかぎではいると、台所の小さな黒板に、

ちよつと旅に出ます。沢次さわじ

とあった。

「そーふらしいね」

咲がいうと、

「ほんと、おとうさんらしい、そーふにはそれがええのかも」

かあさんがうなずいた。

お葬式そうしきがすんでからも、おとずれる人は多い。そーふは人と会いたくない。会いたいののはこよみさんだけなのだ。

⑤ あの手あたりはコーヒーのカップとそのソーサーやからね」

かあさんがいった。

「ソーサーって」

「お皿のこと。中身のコーヒーがこぼれても、その下のお皿はそれを全部うけとめられるんよ」

「へえ、あのうすいお皿に全部？」

「そう」

「どっちがお皿？」

⑥ さあ、どっちがどうなんかなあ」

かあさんは首をか上げた。

祭壇は小さくなっていたが、部屋のすみにかざったままだった。その横の机の上には、ノートのような本のようなものがつまれてあつた。

家計簿だ、とかあさんがいった。

咲は、一、二、三、とかぞえあげた。

「うわっ、三十九冊ある」

「結婚してからずっとつけてたんやね」

かあさんがいった。

はじめは婦人雑誌の付録の家計簿だったが、あとは、市販のうすっぺらなものになっていた。

かあさんはそのうちのいちばん上の一冊を手にとり、

「そうか、これは今年のか」

表紙で年号をたしかめ、

「順番どおりにつんであるんやね。おとうさんらしいわ」

いいながら、ばらばらと見ていたが、

「ほら、咲」

そういって、咲に家計簿を開いて見せた。

一月の、咲の誕生日の週のだった。

それは見開きで一週間になっていて、月曜から日曜日、それぞれの日になにを買い、いくらはらったかを書く欄があり、その上にどんな日かも書くことができるようになっていた。こよみさんは、そこを日記のようにして、ちょっとしたメモを書いていた。右端の日曜日、咲の誕生日のメモにはこうあつた。

咲、十一歳!

今年は、緑子の家族の方がやって来る。

出前のおすしをとる。

「そーふは、たまらなくなつたんやなあ
かあさんがつぶやく。」

「どういふこと」

「これをながめていてね」

かあさんはまたその一冊を手にし、

「ばらばらとめくると、どのページにもこよみさんが出てくる。そやのに、ほら、これ」

□ B □。

「見るとつらい、でも、やめられない」

かあさんはそーふの声をまねていった。

(吉田道子『草の背中』)

問一 □ I □ □ III に当てはまる言葉は何ですか。次のア〜カの中から最も適切な言葉をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア どつしりと イ せっせと ウ のろのろと エ とつとつと オ ぐずぐずと カ しんと

問二 ——線部①「そうしておそわつた」とありますが、これはどのようなことですか。次のア〜エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 「こよみさん」の言っている言葉の意味は分からなくても、そのまま真似まねをして使うことでだんだんと理解していった

イ 「こよみさん」の使った言葉によって、「咲」が見ているものを言い表す言葉はこれなのだとして理解していった

ウ 難しい言葉を使う「こよみさん」にひかれていたので、「咲」から話しかけることで新しい言葉を覚えていった

エ 「こよみさん」が教えてくれるのは言葉だけだったので、「咲」はその意味を自分で考えながら覚えていった

問三 ——線部②「自分のくだきしめるように」とありますが、これはどのようなことですか。次のア～エの中から最も適当なものを
選び、記号で答えなさい。

ア こみあげてきた喜びをおさえようとしている

イ 別れの悲しみをこらえている

ウ 自分の言った言葉を動作で表現しようとしている

エ 今感じている思いをかみしめている

問四 ——線部③「一ミリにもみたくないのに」とありますが、この表現について説明したものとして最も適当なものはどれですか。
次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア クマムシは非常に小さいのに、歩き方がクマのように堂々としていることを印象づけている

イ クマムシが小さいということを、数字で表すことで実感を持ちやすくしている

ウ 目には見えない大きさということで、逆にクマムシについて自由に想像できるようにしている

エ 一ミリにみたくない大きさであるのに、「クマ」と名前がつけられている面白さを強調している

問五 A にはどのような言葉が入ると考えられますか。本文中の言葉を用いて、ひらがな六字で書きなさい。

問六 ——線部④「返事をしなかった」とありますが、それはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えな
さい。

ア 「浅子」が「咲」に投票しなかったせいで、代表に選ばれなかったのだということに察したから

イ 代表に選ばれず悔しいとばかり考えていたので、うまい返事の言葉が思いつかなかったから

ウ 「咲」が代表に選ばれず悔しがっていることを、「浅子」が軽く考えているように思えたから

エ 「浅子」の言葉に返事をしてしまうと、代表に選ばれなかったことを自分で認めてしまうことになるから

問七 ——線部⑤「あの～ソーサーやからね」、⑥「さあ～どうなんかなあ」とありますが、ここから「かあさん」は二人の関係を
どのようなものだと考えていたことがわかりますか。「カップ」と「ソーサー」にたとえていることを踏まえて、五十字以内で
書きなさい。

問八 B に当てはまる言葉は何ですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 他のページと同じくこよみさんの文字がある

イ もうこの家計簿には残りのページがない

ウ ここからはそーふが書かなければならない

エ なにも書かれていない白いページがつづく

問九 本文中に三か所あるくく線部について、あきこさんとはなこさんが話をしています。I く III に当てはまる言葉をそれ

ぞれ指定された字数で書きなさい。ただし、I、II は本文から抜き出して、III は自分の言葉を用いて答えな

さい。

晃子 「こよみさん」は「咲」が「十一歳になった」ことを、何度も口に出しているのね。

華子 I (三字) は大げさかもしれないけれど、そう感じるくらいに何度も何度も言っているということでしょうね。

晃子 II (十六字) ということは、ずっとそのことを考えていたということだね。どうしてかしら。

華子 「こよみさん」が十一歳の時、何か重大なことがあったのかもしれないわ。

晃子 そうね。それは「話すにはちょっと勇気のいる」さもない話なのよね。

華子 さもしいつて確か、「心が汚よじれている」というような意味だったんじゃないかしら。

晃子 そうだとすると、どんなことがあったのか想像できそうね。

華子 私は、III (二十字) と想像したわ。

三 次の①～⑧の―線のカタカナを漢字に直しなさい。

- | | | | | | |
|---|--|---|---|---|--------------------------------------|
| ① | 作戦を ^ネ る | ② | 今後の社会を ^テ ン ^ボ ウする | ③ | 薬の ^コ ウ ^ノ ウを調べる |
| ④ | 巨大な ^{キョウダイ} セキラン ^ウ ンが現れた | ⑤ | 利益を ^{ツイ} キ ^ユ ウする | ⑥ | シユシヤ ^{センタク} 選択をする |
| ⑦ | カイキヨを成し ^ト 遂げる | ⑧ | 彼 ^{カレ} には何を言っても ^{バジ} ト ^ウ フウだ | | |

